



第128号

発行：長崎県特別支援教育研究会
事務局：長崎県立鶴南特別支援学校
編集校：長崎県立島原特別支援学校
発行日：令和6年11月19日

第35回 長崎県特別支援教育研究会 総会及び研究大会 報告

本年度の総会及び研究大会は7月30日(火)に東彼杵町総合会館で行われました。本号では、総会、講演、各分科会の発表・指導助言の内容を報告いたします。

総会報告 開会行事の後、総会が行われました。

- <議題> (1) 令和5年度事業報告
(2) 令和5年度会計報告・監査報告
(3) 会則について
(4) 令和6年度役員紹介
(5) 令和6年度予算(案)
以上の議題が審議、承認されました。



講演

演題 「学習指導要領に基づく資質・能力を育む教育活動」

講師 国立特別支援教育総合研究所 研修事業部 総括研究員 武富 博文 様

1 学習指導要領改訂のポイント

次の学習指導要領の改訂に向けた有識者検討会議で話題に挙がっている内容が紹介されました。

(1) 学習指導要領改訂の五つのポイント

- ① 知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を社会と共有
- ② よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念の共有、共に連携・協働する「社会に開かれた教育課程」の重視
- ③ 「何ができるようになるか」を資質・能力の三つの柱で再整理
- ④ 知識の理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の重視
- ⑤ 教育課程に基づく教育活動の質を向上させ、学習効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント」の重視

※資質・能力の三つの柱をどのように相互に関連付けるか、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせるためにどのような支援を行うかを考える必要があります。

<課題>

各教科等を合わせた指導を行う場合、各教科の目標・内容を関連付けた指導及び評価の在り方が曖昧になりやすく、学習指導の改善に十分に生かしくい。



- ・学校の実態に合わせたカリキュラム・マネジメントの必要性
- ・習得、活用、探究の学習過程が相互に関連し、学習を深められる学習活動の展開
(PDCA サイクル)

2 「学びの地図としての枠組み」

学習指導要領等は、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、以下の六点にわたって枠組みが改善されました。また、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことが求められています。

(1) 「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)

- ・①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性等の三つの柱に再整理

(2) 「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)

- ・単元を貫く主たる「問い」の設定、「問い」のマネジメントと評価計画
- ・「見方・考え方」を生かす授業づくり

(3) 「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)

- ・「習得・活用・探究」をイメージした単元等の構成や時間配分の組織的、弾力的な見直し

(4) 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)

- ・実態把握に基づく一人一人の目標・内容・方法の検討
- ・自立活動の視点から取り組む内容・方法・支援の在り方の検討

(5) 「何が身に付いたか」(学習評価の充実)

- ・「資質・能力の三つの柱」に即した目標を踏まえた「評価規準」に照らし合わせて、一人一人の学習内容の習得状況や定着の様子、変化・変容の状況の確認

(6) 「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

- ・授業コンセプト、学習環境(教材・教具、学習空間等)の工夫、学習者間や学習者と授業者間の関係づくり、学習規律や学習ルールづくり等の視点から検討

各分科会の質疑応答や指導助言の概要

第1分科会【小学校】（小学校における特別支援教育）

「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくり～やる気と自信をもたせる算数科の実践を通して～」

発表者：長崎市立虹が丘小学校 教諭 久保田 龍子

助言者：長崎県教育庁 特別支援教育課 指導主事 多々川 節子

質問	発表者（発表校からの回答）
<p>質問① カブト虫の幼虫が死んだことは、命の教育に焦点がいきそうだが、羽化率につながった経緯、動機は？</p>	<p>・たくさん生まれた幼虫のうち、10匹が羽化できた。子供たちは興味津々だった。「10匹になってしまったね。成虫になるのは大変だね。」と成虫になるまでの大変さ、命の大切さを伝えた。子供たちも「よく頑張ったね。」と、生き物に対する気持ちが変わったように思う。</p> <p>・割合は5、6年生で習う。「率」の意味が難しく、「何かに対して比べるときに、どれくらいだったかで『率』を使うよ。」「49匹が10匹になった。これも羽化する割合＝羽化率なんだよ。」と1時間程度で、身近な教材を使った。</p>
<p>質問② やる気につながった瞬間は、どんな場面につながったのか？</p>	<p>・算数が苦手な児童であったが、100玉そろばんを使ったことで、数を可視化することができた。足し算と他の計算の区別がつくようになると、他の単元も理解が進み、交流学級の宿題まで進んでやるようになった。</p>
<p>質問③ 特別支援学級に在籍している生徒の学年の幅が広く、主体的・対話的で深い学びの学習の実践が難しい。どのように実践されたのか教えてください。</p>	<p>・6年生の児童については、通常学級での学習で、自分が付けなときは、校長先生などに入ってもらい、ほとんど自分で学習できるとの意見をもらったため、通常学級での授業を増やした。週に2、3時間は、複式となるので、自分でできることをしたり体を動かしたりする時間と算数の学習と、時間をずらすなどして、学年ごとに指導できる時間が取れるように工夫した。</p>

協議の柱

～やる気と自信をもたせる算数科の実践を通して～について、教育を進める上で大切なこと

- 自己肯定感が低いので「できた」「分かった」と喜びをもたせて学習を終わらせることが大切だと思った。いつも振り返りをさせているという話だが、振り返りの視点は何か紹介してほしい。
- 「上手にできるようになった」「お互いに協力し合ってきた」など児童からの振り返りがあったり、教師からも「あれ面白かったよ」と言ったり、意欲が見えたとき、お互いの関わり合いの良さ、説明の中で言葉の使い方の良さなど見付けて褒める、などは逃さずに行っている。

○思考力の問題になると、説明することが難しい。思考力や表現力を育てるために、効果的だったことがあれば教えてほしい。

→子供たちの言葉は足りないこともたくさんあるが「何かこういうことを言いたそうだな」を感じ取って代弁するようにしている。「面白い考え方だったね。上手くいったね。」と褒めると、児童が「新しいことを考えてやる。」という気持ちが大きくなり、大事なことを押さえながら発表を促した。積み重ねによって思考力、表現力は上がっていくのではないか。

○子供たちに自信をもたせるために心掛けていることについて(参加者より)

「考えの説明が進んでできるようになった」場合は、交流学級の国語で物語の感想を話す場を設定したり、算数で計算の説明をする場を設定したりすることで、できるようになったことを友達に認めてもらったり、自分の力を自分で確認したりすることができるため、自信につながっていくのではないか。

○教材・教具について(アプリの紹介)

なかおかずと	計算、国語(長音、拗音)、漢字の一部を隠すなどの教材をダウンロードできる。
デイジー教科書	読み上げ、振り仮名を振ることができ、家庭学習の音読学習として使っている。
掛け算マスター九九81	掛け算99を覚えたらスタンプがもらえる。級が取れる。
カフト	合同の学習で使うと子どもが燃えて取り組む。交流学級でも使用した。
書き方プリントメーカー	漢字の書き順、ローマ字、平仮名、片仮名、数字の練習プリントが作成できる。
スラスラプリント	言葉のイメージが難しい子供に対して、言葉を絵で表すことができる教材。
キャンバ	文字を打ち込むと絵が出てくる。お話づくりもできる。

指導助言の概要

〈小学校における特別支援教育の現状〉

- ・特別支援学級の設置数は、全種別1206学級、自閉・情緒523学級、知的441学級であり、ここ5年間で知的と自閉・情緒の学級数が逆転している。
- ・学級数の増加に伴って児童数も増加し、在籍が6人以上の学級が全体の3割である。
- ・指導教諭の派遣や管理職・特別支援教育コーディネーター・交流学級担任等と連携した校内体制の整備を行い、学校が組織として関わってほしい。

〈学習指導要領に基づいた指導・支援〉

- ・「主体的・対話的で深い学び」は目標を達成するための手段であり、単元のどの場面で、どのように設定していくかという視点が大切である。その学びを通して、目標は達成できたのか、何が身に付いたのかを評価しなければならない。
- ・学習の過程で、児童生徒の頑張りを細かく認めたり、称賛したりすることで、自信や主体的に取り組む意欲を育む。
- ・実際的な生活場面の中で、具体的に思考や判断、表現ができるようにする指導が効果的である。

・PDCA サイクルによる見直しを行い、適切な指導や必要な支援を行っていくことが大切である。

〈やる気と自信をもたせるために〉

- ・実態把握に基づいた目標や指導内容を設定し、「これならやれそうだ」という見通しをもたせる。
- ・日々の小さな成功体験の積み重ねが自信につながる。

第2分科会【中学校】(中学校における特別支援教育)
 「般化のプロセスを重視した自立活動の実践～成功体験としての交流学习を目指して～」
 発表者：長崎市立三和中学校 教諭 篠原 昂太
 助言者：長崎市教育研究所 教育支援係 主任指導主事 平戸 健吉

質問	発表者(発表校からの回答)
質問① 校内委員会はどのようなメンバーですか。	・教育相談部会という場において、は2週間に1回で話し合いをしている。メンバーは特別支援教育コーディネーター、養護教諭、管理職で行っている。
質問② 技能教科の先生が入っていないのは、時数の問題なのか。	・学校の実態に合わせて、支援充実のために全職員で協力している。知的学級は技能教科の先生も5教科の授業を担当できるが、情緒学級は教科の免許が必要。バランスを見て教科時数の配置を行っている。
質問③ 自立活動のときに、般化がうまくいかなかったときには、どのような改善のアプローチをしているのか。	・まず、自信をつけさせたい。「学習上の困難を解決する」ではなく、生徒が学習方略を知り、それを使うことができるようにしてきた。(例)こだわりが強い生徒に対して、筆算をするよう指導していたが、待つようにした。本人のペースで解くのを待ち、できたときにしっかりと褒めたことで、本人は自信をもって学習に取り組むことができるようになった。

○実態把握について

・特別支援学校では、小グループを組んで、指導を行っている。課題は様々なことにわたっている。高等部は、自分の課題を考えたり、小学部では、家庭の様子を把握して、課題の整理を行ったりしている。

○自立活動の般化について

・般化のプロセスとして、小学部の自立活動のねらいは、体の使い方や人間関係の構築についてのつまずきを改善するイメージで取り組んでいる。目標設定は長期目線で行っている。般化を評価する場面というのは、特定の場面ではなく、学校生活全般で行っている。

○合理的配慮について

- ・情緒学級では、集団に入れない生徒が多い。自分ができることでも成功体験をもたせていき、スモールステップで集団に入れるための指導を行っている。
 - ・情緒の生徒の進学先については、登校を促すよりも社会に適応するために、長期の目線で考える必要がある。卒業後にどのように生活するのか。病院や手帳の取得など。
- (三和中)交流授業の先生との連携が大事である。自立活動の目標設定シートのようなツールは使っていないが、自立活動の六区分を下に授業の目標設定をしている。自分の持ち授業については、自分の中で完結しているという感覚はある。しかし、交流で般化を目指すことを考えると、ツールを使って、他の先生と情報共有するのも大事であると考え。

指導助言の概要

- ・障害のある人が社会に参画するときに、「障害のある人が頑張らないといけない」という考え方に陥っているのではないかと。障害は個人にあるのではなく、個人と社会の間にあり、障害のある人を受け入れない社会の側にある、という視点をもつことが大切である。
- ・生徒の教育的ニーズや特性、強みを校内で共有できているか、自立活動の週当たりの時数は適切なのか、教員はすべての子供たちが分かる授業づくりをしているのか、を確認していないといけない。校内の特別支援教育の最高責任者である校長のリーダーシップの下、学校全体で取り組み、全職員で教育を行っていくことが大事である。
- ・発表の中で、校内支援委員会を前年度末に行き、教員の授業配置を見直したことで、個別の対応ができていることは評価できた。教育課程では、当該学年の教科指導をするのか、下学年のものをするのかの判断を明確にしていく必要がある。
- ・生活単元学習とは教科ではなく指導形態である。知的障害のある生徒はその特性上、学んだ内容の定着が断片的になりやすく、成功体験が積み重ならないことが多い。特別支援学校学習指導要領にある各教科等を合わせ、実際の生活に根差した内容を学習として経験し、課題を解決することの方が生徒の自立や社会参加につながり、効果的である場合に行う。活動ありきで内容を設定するのではなく、各教科等の目標に沿って行っていく必要がある。
- ・交流での授業が、支援学級での成功体験を生かせる場になっていることも重要である。周囲の人の配慮や環境整備によって、障害のある生徒も活動に参加していける。そのためには、授業を行う教員の授業研究や授業環境づくり、綿密に練られた支援計画の作成、教員同士の連携が必要不可欠である。

第3分科会【特別支援学校】(教科別の指導)

「子供たちの学びを深める ICT の活用～高等部における ICT を活用した授業づくり～」

発表者:長崎県立佐世保特別支援学校北松分校 教諭 宮原 智珠 大宮 幸

助言者:長崎県教育庁 特別支援教育課 係長 山崎 浩

質問	発表者(発表校からの回答)
質問① 体系表について、中学部と高等部が 1段階でまとめられているのはなぜか?	・参考にした文部科学省の体系表が1段階でまとめられていた。 ・学校内で検討会を行った際、それぞれの段階でもう少し細かい内容だったが、まとめた方が見やすいという意見が多く、このような形になった。
質問② 宿題への活用事例を知りたい。	・宿題としての持ち帰りは、まだ行っていない。ルールが整っていないため、学校での使用に留まっている。保護者から要望があった場合(運転免許や資格取得の勉強のため)は、持ち帰って使用することがある。
質問③ 情報モラルについて、どう指導されているかを知りたい。	・個人差があり、授業中に遊んでしまう生徒もいる。学習場面でiPadを使用するというルールを決めている。昼休みは、教師と一緒にのみ使用している。教師のiPadで、生徒のiPadの画面を見られるよう設定しており、確認することができる。
質問④ 教育活動の中でのICTを使った活動の位置付けを知りたい。自分達の学校でも、授業で取り扱っているが、ICTを使うことが目的になってしまった。どういった学習での活動が効果的だったかを知りたい。	・情報活用能力の育成という視点は、全ての授業においてもおくことが大切だと思う。教育課程には、小学部は生単、中学部は総合の中に単元を組み入れている。他の単元でもICTを活用しているが、本来の学習目的と基本操作の学習の両立の難しさは、自分たちも感じながら授業をしている。現在は、中学部は総合で単元を組んでいるが、今後、職業家庭の教科を起こした場合は、そちらでの取り扱いにしようかと考えている。

協議の柱

「ICTを使った授業実践の紹介」「授業で活用しているアプリの紹介」「教育課程での位置付け」について

※「パドレッド」というアプリを使用し、出た意見をスクリーンに映しながら各学校が詳細を発表した。

(良い実践やアプリだと感じたら、「いいね」を押す。)

○ICTを使った授業実践の紹介

- ・Excelで学習記録表を作成し、夏休みに持ち帰って記録をとるようにした。
- ・生単の授業で、「NHK for School」を視聴している。
- ・入院している生徒や不登校の生徒に対して、Teamsを使って授業をしている。等

○授業で活用しているアプリ等の紹介

- ・音の波形を見るアプリを理科の単元で使用した。
- ・「アースボール(スマホやタブレットと連動して、世界各国の情報を視覚的に得ることができるアプリ)」
- ・「カフト(クイズを作るアプリ)」 ・「マジックロードカー(プログラミング)」 ・「シンプル観察日記」等

○教育課程での位置付けについて

- ・おおむね、どの学校も「情報」「職業家庭」「生単」での取り扱いである。ICTの活用は、必要に応じて、様々な授業の中で行っている。

指導助言の概要

〈情報活用能力の学習指導要領における位置付け〉

- ・情報活用能力は、「言語能力」「問題発見・解決能力等」と同様に、学習の基盤となる資質・能力である。
- ・情報活用能力は、問題を発見・解決したり、自分の考えを形成したりするために必要な資質・能力である。
- ・特別支援教育においては、情報活用能力を指導するに当たり、基礎的・基本的な事項に重点を置くこと、個に応じた指導の充実を図ることが示されている。また、教科指導の効果を高めたり、障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服したりするために、ICTを活用するという視点がある。

〈北松分校の取組について〉

- ① 教師に向けた iPad の操作研修
- ② 「情報活用能力体系表」「情報教育全体計画」の作成と活用
- ③ 授業プランシートを活用した一人一授業

と、段階的な取組が行われているところが良かった。また、「情報活用能力体系表」「情報教育全体計画」の視点を入れた授業を行うことで、情報活用能力の育成に向けた系統的な手立ての構築を探ることができた。実践を通して、「視覚化された情報が、子供たちにとっては非常に分かりやすかった」「リアルタイムで『いいね』の評価をもらうことが、子供たちの意欲的な取組につながった」という評価から、ICTを活用することの教育効果が表れた実践だと考える。そして、「子供の操作スキルが上がった」「書くことへの苦手意識が軽減した」といった変化が見られたり、「子供たちにとって新たな表現手段の一つになった」という成果を得られたりしたことと思う。

- ・情報モラルの育成として、「GIGA ワークブックながさき」を活用してほしい。今後、研修が行われる予定である。

〈まとめ〉

- ・ICTを活用して、学びを深めるとはどのようなことか？
- ・(何を学ぶのか)を考えてほしい。ICTを活用することで、教育的効果が得られると考えるから活用する、子供の「見方・考え方」の困難さを補うために活用するという視点が大切である。
- ・ICTを活用することで、どのように学びが深まったのかの検討(活用した場合とそうでないときの比較)もしてほしい。

第4分科会【特別支援学校】(キャリア教育・進路学習)

「高等部における進路指導の実践

～地域社会の一員として主体的に生活する力を育むことを目指して～」

発表者：長崎県立島原特別支援学校 教諭 隈部 憲也 狩野 邦徳

助言者：長崎県教育センター 教育支援研修課 特別支援教育研修班 主任指導主事 大串 尚央

質問	発表者(発表校)からの回答
<p>質問① 島原半島地域の事業所との学習会(学ぼう会)について詳細を知りたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・半島内の事業所の方を中心に行っている研修会。半島中の福祉事業が集まっている。仕事面のみならず、福祉制度のことや障害についても学習することができる。 ・テーマによっては本校高等部職員も自主的に参加。事業所との顔合わせを行うことができる。現場実習の事前打ち合わせ等で伺うが、その前に顔つなぎを行うことで話を通しやすい。 ・コロナ前は、事業所と職員で懇談会を行い、顔つなぎをしたり卒業後や就労に向けて、どのようなことができたらいかがを話したりしていた。
<p>質問② 小学部段階で身に付けておきたい力は何か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部段階から約束事やルール、マナーの指導を行う。 ・挨拶・返事・素直な心等、大切なことは多くあるが、企業の方から「『ありがとう』と『ごめんなさい』を伝えることができる人を採用したい。」と言われた。してもらったことに対して、お礼を言葉にして伝えることは大切である。してもらったときは「ありがとう。」、失敗したら「ごめんなさい。」を伝える。 ・「コミュニケーションが苦手でも、笑顔で働いてくれたら採用したい。」という企業もある。
<p>質問③ 島原特別支援学校で離職に対して取り組んでいることや指導していること、これからしていきたいことは何か。</p>	<p>【離職理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給与面、注意に対する本人の捉え方、周囲の理解不足 <p>【指導していること】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仕事に対する捉え方 ・自己理解に関する内容 ・続けることや努力することで得られる達成感や成就感

○島原特別支援学校

・職業(進路)の授業で、高等部卒業生の仕事の様子や、どのようなことを考えて働いているかを話している。

生徒の事例①：保育補助の仕事をしている。陸上も高等部から継続して取り組んでいる。仕事も大変であるが、やりがいがあれば頑張れる。

生徒の事例②: 鉄工所の仕事をしている。朝が苦手だが、鉄工所の仕事をしたい。仕事場が居住地から離れていて、公共交通機関がなく、6時30分発のバスに乗らなければならない。通勤など成功して続けていけるように、バスに乗ったのを確認するなどの指導をしていた。仕事は、10年近く続いている。資格もその間に取得。留学生の指導等も行っている。

・以前は、卒業した先輩に職業の授業で、仕事について話してもらっていた。

○佐世保特別支援学校

・卒業生の就労定着支援が課題として挙がっている。実習でとても評価が良かったが、何週間かで離職してしまった。その原因を職員で話し合った。実習と就職、実習と普段の学習がつながるよう実習先の評価、課題等を作業学習に生かしている。実習に行く目的、就職をするための意識を普段の授業で培う。実習の課題を学校生活等で改善していかなければならないのではないかと。

⇒(島原)

島原特別支援学校では、評価を実習最終日に行い、実習での取り組みについて保護者、本人、実習先を含めて共有する場面を設ける。報告会で目標ややりたいことを再確認して、日々の教育活動に取り組みサイクルで、3年間指導している。実習先には従業員としてみての実習評価をお願いしている。

○長崎大学附属特別支援学校

- ・1学年1クラス、8名という小規模校で、就労する生徒は2~3名。定着率は高いと感じる。
- ・学年ごとにテーマを決めている。一番大切にしていることは「自己理解」。生徒がどこで働きたいかを3年生時に本人から聞いて、先方とマッチングをしてつなげている。
- ・自己理解を深めるために行っていることとして、3年間を通じて、「セルフサポートブック」の活用(キャリアパスポートに代わるもの)をしている。苦手や得意なことなど自分のことを知るために使用している。
- ・昨年度、キャリア教育全体計画を見直した。仕事、生活、余暇の3本柱として、小・中・高で系統性をもって実施。余暇の点では、高等部から楽しみを探すことが難しい。小学部から学習を積み重ね、12年間の学習の中で自己理解を深め、最後に自分に合ったところを選択し決める。その際は、生徒が思う大事な条件・ポイントを大切に、決定させる。
- ・セルフサポートブックについて知りたい方は、11月に長崎大学でフォーラムを行うため、参加してほしい。

○希望が丘高等特別支援学校

- ・定着率が低く、離職率が高くなっている。3日でやめる生徒もいる。
- ・現場実習が3年間で5回、島原と同様。1日で、お礼状や今後の課題の把握、報告会を行っていて、指導の難しさを感じる。課題がでたところを学校生活につなげられているのか検証が必要。
- ・自分が働きたいところを、自分で決めることが大切であるが、自分が働きたいところと働き続けられるところは違うため、自分を正しく知ることが必要。自分ができる仕事、したい仕事につなげられるような3年間にしたい。定着率につながる教育活動実践は、これからの課題である。

○鶴南特別支援学校

- ・本校では寄り添った指導が充実している。担任が個に応じた、自己理解のための指導支援をしている。
- ・進路面談だけでなく個別面談でも行っている。実習の様子や課題、良かった点、頑張りたいこと、どのような仕事をしたいかを一枚の資料にしている学年もある。口頭だけではなく、視覚化している。実習では、評価表の内容だけではなく、生徒の見ていただきたいところを伝え、ありのままの評価をお願いしている。優しい評価は、課題の克服・改善につながらない。実習先に細かく評価していただいている。3年間で5回の実習を行っている。
- ・自己理解が自己決定につながる。自分の得意なところ、苦手なところを知り、自分で決めることは、定着率につながる。
- ・今年度の卒業生が、2か月で諸事情により離職。場面に応じた対応の仕方について、漠然とした指導ではなく、具体的な指導をする必要がある。このような場面ではこのような対応が必要であること等を、指導することも大切である。
- ・五島分校では、実習先の巡回の際に、障害者就業・生活支援センターやハローワークにも同行してもらい、生徒の実態を見てもらった。支援が必要などを知ってもらう。

○虹の原特別支援学校

- ・昨年の取組で、自己理解のため、それぞれの学年でどのような項目がよいかを考えている。3年生が実習報告会で、就労形態に応じて各ブースを設け、3年間どのようなことを考えてきたのか、課題等を発表。1年生、2年生は3年生の発表の様子を見学することで、知る・考えることができる。知ることで職業定着につながるのではないかと。
- ・寄宿舎は交代勤務のため、引継ぎでは、時間を守る指導を行うよう共有している。時間を守って生活することや集団生活の中で協力していくこと（配膳等）が大切であることを伝えている。

○島原特別支援学校

- ・自己理解という点で、保護者と本人は一般企業に就職したいと考えるが、担任は厳しいと考えているパターンがある。本人の能力に合ったところへ就職させたいが、認識をすり合わせる事が難しいと感じている。

指導助言の概要

- ・島原半島唯一の学校。生徒や保護者にとっても期待が大きい。島原の責任感や使命感が強いと感じた。
- 〈「育てたい力」・目指す生徒像（高等部）について〉
- ・衛生関連（手洗い、汗の処理、洗濯、入浴、爪）については小学部段階から、徹底して指導する必要がある。食品関連の就職が難しくなる。仕事の幅を狭めることがないように、小さい頃から手洗いの指導をしていくべきである。
- 〈島原特別支援学校のキャリア教育全体計画について〉
- ・高等部のみでは成り立たない。小学部段階から取り組んでいく。他学年の指導のねらいを把握して、一貫した指導を。小学部や中学部の指導が、高等部の指導につながる。高等部は育ててきた生徒を引き受ける気

持ちで。一貫した指導というが、学部間でうまく引継ぎができていなかったり、指導していることが分からなかったりするため、共有していく必要がある。

〈生徒及び保護者への説明〉

・保護者が進路先をどのように知るか、実習や評価、見学等で示す機会は保護者にとっては分かりやすい。教育課程の中身や指導を保護者がどのくらい理解しているのか。小学部、中学部、高等部の指導やねらいを保護者・本人が分かっているのか、学校がどのような指導を行っているのかを、保護者が知る機会をつくる必要がある。

〈進路指導の実際について〉

・細やかに丁寧な指導を行っていると感じた。島原城の除草作業など、伝統的な校外実習や、進路開拓など外部とつながりを設けるなどはよい取組である。

〈進路に関する情報の提供について〉

・卒業後の生活についてどのようなタイミングで提示するか。保護者に話して、早い段階からショートステイ等の福祉サービスを利用して、親元から離れて生活する経験を積ませることも必要である。

〈卒業生との関わりについて〉

・高等部で挙げている目標や「育てたい力」と目指す生徒像が達成できていると評価できるのは、卒業後どのように生活を送っているのかに関わってくるのではないかという考えについて、保護者に対しては卒業後にしか結果は分からないとは言えない。自信をもって送り出すための学習をさせなければならない。

・離職とも関わってくると思うが、生徒がなぜ辞めたのか、本人や保護者に聞いて、離職の理由を知ることも大切なのではないかと思う。難しいのであれば、卒業後の1年後にアンケートを聞いてみるなど、取り組んだことがどのように生きているのか、指導の成果と課題を教育課程や、指導内容に反映する必要がある。

・県外の職場の見学時のこと。実際に働いている障害者の方の話をした際、休日はどのように過ごしているかという質問に、「休日は資格を取るために勉強している」と答えた。衝撃を受けた。「休日は休みたいが、資格を取りたいと思う理由は」と聞くと、「目指している資格を取ると、職場の班長が助かる」と回答。今、進路指導で会社への貢献・同僚への貢献・就職後のスキルアップを取り入れている学校は少ないのではないか。割合的に、就職のスタートラインに立つ学習は多いが、走り続けるための学習は足りないかもしれない。学校として、在学中に取り組まなければならない内容なのではないか。学校で検討を。

・仕事はスマホで探せる時代。生徒のほうがよく知っている。やり方も知っている。学校は仕事の質の高いものが紹介できるが、スマホで探せるものは、アルバイト等が多い。十分に理解できず、友達同士のネットワークで飛び交う情報を信じて仕事を辞める生徒も多い。スマホで探すことの良し悪しを理解させる。大人の意見を大切にすることも理解させてほしい。就職後、働き続けるための指導内容が何かないか各学校で検討し取り組んでほしい。

第5分科会【特別支援学校】(自立活動)

「個々の実態に応じた自立活動の実践に向けて

～小学部における外部専門家を活用した自立活動の指導実践～

発表者：長崎県立鶴南特別支援学校 五島分校 教諭 櫻井 咲紀 山口 奈菜美

助言者：長崎県教育センター 教育支援研修課 特別支援教育研修班 指導主事 福田 和代

質問	発表者(発表校)からの回答
質問① マットや、草履の機能は足底の感覚を慣らすためのものか。	・足先の浮指を改善するために行った。感覚刺激のほかにも足先に重心を乗せるためである。
質問② 椅子にタオルを巻いたら姿勢がよくなったのは、なぜか。また、骨盤が後傾している子以外にも有効か。	・椅子に布を巻き、布にお尻が当たるように座らせることで、深く座る意識を高めた。本人にとって意識しやすい手立てとなっていた。
質問③ 「時間における指導」は、小学部週3時間、中学部週1時間であり、小学部に比べて授業時数が少なくなっている。自立の授業時間が3分の1になるが、時数の確保に関してジレンマなどはあるか。	・校内研究の中で大きく課題として挙がったということはないが、現状として、指導を行う環境(施設・教員)が整っていない。グルーピングの工夫等があれば知りたい。 ・学部間で指導内容の引継ぎはしっかり行っているが、小学部から中学部に上がったときに、少ない時数の中でどのように指導できるかが課題である。
質問④ 浮指について、原因はどこにあるか。	・外部専門家からの指摘はなかった。教員の見立てとして、感覚刺激への反応が鈍いからだと思う。また、遊ぶという経験も少なく、目的に応じた動かし方が育っていないのではないか。
質問⑤ 粗大運動がぎこちないとあるが、そもそもなぜぎこちないか。	・成育歴や疾患から考えると、生活や運動の経験不足によって、動きのぎこちなさが顕著に表れているのではないか。

協議の柱

具体的な指導の設定をする際に困っていることや工夫点について

OA 班

- ・具体的な指導内容まで、複数の目で設定できているかどうかは課題に挙がった。本来は目標設定して、項目選定して、それを関連付けて具体的な指導内容を設定して、と協議していくはずだが、実際は目標設定したあと個人作業になり、協議を複数名で行えていない。
- ・授業内で、45分を3ブロックに分けて、必ず一人ひとりにスポットが当たるような時間を設定している。
- ・指導内容や目標設定が似通っている子供を集めてグルーピングしている。

- ・週時数が限られているなら、ある週は個別、ある週はグループなど、いろいろな学習集団で学べるようにしている。
- ・指導のレポーターが少ないという問題に対しては、共有フォルダ内にシートを作っておき、より効果的だった具体的な指導内容を入れて蓄積している、という学校があった。
- ・目標設定するには、27項目から何を選定するかという部分の理解を深めておかなければならない。児童生徒の実態から、どの項目を選定するか、協議していかねばならない。

○B 班

- ・学びの履歴や前年の指導のやり方など、前年度のまま引き継いでも、「私がやったらできない」ということもある。
- ・前年度担任が課題関連図や整理シートを作り、グルーピングまで行う。その目標のまま実施できるかを新年度の担当が再度検討する。2か月ほど経ったころ、子供一人あたり20分くらいの時間を設けて、前担任、今年度担任、など複数名で協議している（島原特支）。
- ・中学校から入学する生徒が多かったり、生徒数が多かったりする学校もあるので、限られた時間の中で1名ずつ協議をしていく工夫があれば知りたい（希望が丘特支）。

○C 班

- ・「時間の指導（高等部は 0.5時間）について、指導内容は設定できているが、それに応じたグルーピングができていない。生徒の実態に合わせた5人1グループを作って指導している。」という課題に対して協議を行った。
- ・グルーピングをするときに指導内容から組んではどうか。また、0.5時間の使い方について、前半は個別的、後半は集団的など、使い分けてはどうか、と助言があった。

○D 班

- ・佐世保は、からだ、情緒、人間関係・コミュニケーションの3グループ。からだグループは生徒3名、教師2名。情緒グループは生徒1名、教師1名。人間関係・コミュニケーショングループは生徒6名、教師2名。教師2名で生徒6名の指導を行わなければならない、それぞれの目標にあった授業が十分にできていない。人手不足や場所の少なさが課題。目標設定シートの話し合いはできるが、十分な実践ができていない。改善案を探しているが毎年積み残している。

○E 班

- ・川棚も前年度にグルーピング等を検討しているので、新年度に動き出しやすい。ただ、環境が変わればその通りとはいかないので見極めが難しい。
- ・目標設定まで話し合う時間がない。虹の原は、短縮授業を行う期間があり、下校時間を早めて検討会を設定している。
- ・島原は、検討会を少人数で実施できている。

- ・指導内容について、グループでねらうべきジャンルは一緒かもしれないが、個々の課題にどうスポットを当てるかが課題である。
- ・生徒の人数が多く、教員が少ない中での実施について、課題解決していかなければならない。

OF 班

- ・指導の妥当性について、どのタイミングで見直したり共有しあったりしているか、取り組まれている学校があれば知りたい。
- ・自立の研究授業や、授業公開を行うなどの機会があれば、内容についてブラッシュアップできていくかもしれない。

OG 班

- ・北松は目標設定までは協議できているが、あとは担当任せで教員の力量頼みになっている。
- ・夏休み期間に中間評価会を設けており、目標設定や1学期の指導について話し合えている。高等部での時間の指導も始まったばかりではある。学部を超えて小中高の教員が混じって、話し合うようにしている。中間評価会はシートを作成して回覧することで情報共有している。

指導助言の概要

- ・〈新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告〉には、特別支援学校の教師は障害の特性や発達段階等を把握し、自立活動の指導等に反映できる幅広い知識や技能の習得や、学校内外の専門家等とも連携しながら、専門的な知見を活用して指導に当たる能力が必要であると述べられている。
- ・「第二期長崎県特別支援教育基本計画第一次実施計画」においては、自立活動の指導のさらなる充実のため、県内すべての知的障害特別支援学校の時間割に自立活動の時間における指導を位置付けると示されている。
- ・教育センターでも、各学校の自立活動を推進するリーダーの先生を対象に、自立活動の指導リーダー研修講座を実施している。
- ・全国特別支援学校知的障害教育校長会が令和2年から3年間実施した調査の結果、自立活動の充実のために必要なこととして、「担任の専門性を高めるための研修」が最も多く挙げられた。他にも、「個別の指導計画の改善充実」、「外部専門家の導入」が挙げられていた。
- ・担任の専門性を高めるための研修や外部専門家の導入は、県内でも組織的に取り組まれている。

○自立活動の充実に向けた専門性を高める取組について

- ・リーダー研修でのアンケートによると、多くの学校が、目標検討会や研修会を実施していた。特に、知的障害特別支援学校においては、「目標設定シート」や「目標設定の進め方」など、自立活動の指導の手続きに関する研修会実施が多かった。

→自立についての手続きに関する理解やスキル向上は特別支援学校の課題である。

- ・学習指導要領自立活動編に示されている実態把握から目標設定までの流れ図は、すべての障害種に共通している。つまり、どの障害種であってもこの流れに沿った手続きを丁寧に進めていくことが求められている。この流れを可視化したものを、教育センターでも作成し公開している。
- ・教育センターでは、初任から3年間、自立活動の指導に関する研修を実施している。基礎や実態把握、指導内容の設定、授業づくり、評価、改善について系統的に学んでもらっている。その内容をもとに、オンデマンド研修動画を作成し、公開している。
- ・リーダー研では、「若手は、研修を経て自立活動の指導については理解しているようだが、実際の指導では苦戦している様子」という意見があった。
 - 研修の場では、協議を通して理解が深まり、講師の説明などを聞いて納得することができている。中心課題の明確化や課題の関連の検討などは、手順を理解すれば一人でできるようになるというものではなく、繰り返し行う中で力量は高まっていくのではないか。
- ・「目標設定を行う際に、複数の教員で検討する機会があるか」という問いには、80%以上が「ある」と回答。学級や学年などのグループでの検討や自立活動部からの助言、教務主任からの助言などのかたちで実施されている。
- ・「確からしさを高めるための取組」(福岡教育大 一木薫教授より)
- ・正解を求めるというイメージではなく、「確からしさを求めるというイメージ。よりスキルの高い先生の意見を受けることで、指導の根拠を確かなものにすることができるのではないか。
- ・数をこなしていくことで、精度は高まっていくと思うが、一人で考え続けることは苦しさもある。だからこそ、一人ではなく複数の目で検討することで、確からしさは高まる。
- ・複数の教員で検討することのメリットとして、教員の力量を高めることだけではなく、納得して指導に当たることができる。
- ・ある学校では目標検討などのために短縮授業に日課を設けている学校もあったが、そのように、「複数の目で確かめていく」ことを一過性でなく、継続して取り組んでいくためには、学校の状況に応じて、方法を模索していかなければならない。学校組織として、継続して実施するための校内システムの検討を行っていく必要がある。

○外部専門家の活用について

- ・県内の特別支援学校での外部専門家活用例として、理学療法士、作業療法士、言語療法士などを招き、個別の事例に対して助言をいただいたり、その内容を研修会等を通して校内で共有したりしている。
- ・指導方法の助言だけでなく、実態把握についても助言してもらっている。

- ・第二期長崎県特別支援教育推進基本計画第一次実施計画では、各学校が外部専門家を活用できているが、他の学校がどのような外部専門家を活用しているか情報を共有する場がなく、外部専門家が固定化する傾向にある、と示されている。
- Teamsなどを活用するなどして、各校で活用事例の共有を行ったり、可能な範囲で助言内容についても共有したりするとよいかもしれない。
- ・学校と学校をオンラインでつないだ研修なども各校で進められている。本校と分校での合同研修会などによって、より多くの教員が専門的な知識を得られるのではないかと。
- ・異なる障害種の特別支援学校から情報を得ることも有益である。各校の連携を高めていく必要がある。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・外部専門家活用事例の共有・専門的知識の共有・助言内容や研修内容の共有・蓄積（蓄積してのちの指導にも活用していく）・チーム力。みんなの力で自立活動の指導の充実に向けて第一歩を!! |
|--|